

# 山口県鯨類目録

石川創<sup>1)</sup> 渡邊俊輝<sup>2)</sup>

A catalogue of whales and dolphins recorded in Yamaguchi Prefecture, Japan

Hajime Ishikawa<sup>1)</sup>, Toshiteru Watanabe<sup>2)</sup>

- 1) 公益財団法人下関海洋科学アカデミー鯨類研究室（下関鯨類研究室）〒750-0036 下関市あるかぽーと6-1  
Whale Laboratory, Shimonoseki Academy of Marine Science, 6-1 Arcaport, Shimonoseki City, Yamaguchi 750-0036,  
Japan
- 2) 山口県水産研究センター外海研究部 〒759-4106 長門市仙崎2861-3  
Yamaguchi Prefectural Fisheries Research Center, 2861-3 Senzaki, Nagato City, Yamaguchi 759-4106, Japan

## 要旨

明治（1868）以降2014年7月までに山口県で記録された鯨類を、文献、ストランディングレコード、目視調査の結果等から取り纏めた。以下の鯨種が確認された。セミクジラ、コククジラ、シロナガスクジラ、イワシクジラ（以上、明治期のみ）、ナガスクジラ、ツノシマクジラ、ミンククジラ、ザトウクジラ、マッコウクジラ、コマッコウ、オガワコマッコウ、オウギハクジラ、バンドウイルカ、カマイルカ、ハセイルカ、マダライルカ、スジイルカ、シロハイルカ、ハナゴンドウ、コビレゴンドウ、シャチ、スナメリ。このうち最も記録が多い種はスナメリであり、瀬戸内海側では常在する種であると考えられる。次いで記録が多いのはミンククジラで、県内の日本海側においてはストランディングレコード（混獲を含む）の47.1%を占めた。本種は県内では1月～4月に記録が多いが、夏期においても発見があり、周年分布している可能性がある。

## Abstract

Yamaguchi Prefecture is located in the westernmost part of Honshu, the main island of Japan. It faces the Sea of Japan in the north side and the Seto Inland Sea in the south side connecting by Kanmon Strait. Historically, old type coastal whaling was operated at some villages in the Sea of Japan side from 17C (Edo-era) to beginning of 20C (Meiji-era). We collected cetacean records in Yamaguchi Prefecture from beginning of Meiji-era (1868) to July 2014 by literature, stranding records and our sighting survey. Following species were listed; right whale, gray whale, blue whale, sei whale (these four species were recorded in only Meiji-era), fin whale, Bryde's whale, Omura's whale, common minke whale, humpback whale, sperm whale, pygmy sperm whale, dwarf sperm whale, Stejneger's beaked whale, bottlenose dolphin, Pacific white-sided dolphin, long-beaked common dolphin, pan-tropical spotted dolphin, striped dolphin, rough-toothed dolphin, Risso's dolphin, short-finned pilot whale, killer whale and finless porpoise. Finless porpoise was the most frequently recorded in the Seto Inland Sea, whereas common minke whale was the most frequently recorded in the Sea of Japan.

## はじめに

山口県は本州の最西端に位置し、日本海、瀬戸内海およびこれらを接続する関門海峡に面している。鯨類との関係では、日本海に面する瀬戸崎（長門市仙崎）で1672年から鯨組による組織的な捕鯨が始まり、その後萩市～下関市の日本海側数か所で、いわゆる北浦捕鯨と呼ばれる古式捕鯨が20世紀初めまで行われたことが知られ（徳美 1971、多田 1978）、少なくとも明治期までは日本海沿岸に捕獲対象となる大型のヒゲクジラ類が多数来遊していた。美島（1899）によれば、山陰西南部から九州西北部に至る海岸では、11月から翌年2月末まで東北より来る（南下する）鯨を「下り鯨」と称し、3月末から5月に至る間に西南より東北に帰る（北上する）鯨を「上り鯨」と称していた。「下り鯨」とはすなわち寒冷な索餌海域から温暖な繁殖海域に向けて回遊する鯨であり、「上り鯨」とは、繁殖海域から出産を終えて再び索餌海域に回遊する鯨を意味するが、北浦捕鯨ではこのうち前者が主たる捕獲対象であった。

しかし北浦捕鯨に限らず日本沿岸各地の古式捕鯨は、江戸時代末期には来遊する大型鯨類が減少し、各地で慢性的な不漁となっていた（中園 2001）。さらに20世紀に入り、動力船と捕鯨砲を用いる近代捕鯨が導入されると、日本海の大鯨類資源は急速に減少した。石川ら（2013）は、20世紀以降の日本沿岸における鯨類のストランディングレコード（座礁・漂着・迷入・混獲の情報）を網羅したが、日本海側での大型鯨類の記録は、現在ではミンククジラを除けば極めて乏しい。

本報告は、下関鯨類研究室が取り組んでいる山口県日本海側の鯨類分布調査での収集情報および、ストランディングレコード、文献等から収集した、山口県における鯨類の目録である。山口県日本海側における近年の鯨類出現情報については河野（2008）の報告があるが、本報告では、昨年当研究室が編纂したストランディングレコード（石川ら 2013）およびその後の収集情報、ならびに北浦捕鯨および近代捕鯨による捕獲情報も加えることで、山口県の日本海側および瀬戸内海側での鯨類の出現記録を明治初期まで遡って記録した。この中には、もはや長年にわたり県内で発見されていない種も含まれるが、商業捕鯨が停止して以来30年近くが経過し、減少した大型鯨類資源も一部の種で回復の兆しが見られる中、今後またそれらの種が出現する可能性を否定する理由は無い。本報告が現在の山口県近海の鯨類相を提示する資料としてのみでなく、将来の大型鯨類発見時の参考にもなれば幸いである。

## 材料と方法

本報告では、原則として山口県内で明治期（1868年）以降2014年7月までに鯨種が特定できる捕獲記録、ストランディングレコード（座礁・漂着・迷入・混獲記録）、目視調査記録の他、文献や記事で入手された情報を取り扱った。明治期の捕獲記録については、主に多田（1978）による鯨種別捕獲統計を引用した。ストランディングレコードについては、石川ら（2013）を元に、その後に収集された情報を加えたデータベースを使用した。目視調査記録については、下関鯨類研究室が山口県水産研究センターと共同で2012年から継続している、山口県沖の定線海洋観測を利用した目視調査結果および、文献で収集された過去の他機関における目視調査記録を用いた。一部鯨種については、その生態や季節分布等の理解のため、山口県のみでの発見情報に限定せず、広く日本海側での記録を紹介している。

なお、本報告における古式捕鯨とは、国内で1570年頃より三河で始まったとされる、専業の捕鯨集団である鯨組による突取捕鯨や網掛突取捕鯨（中園 2001）を指し、山口県内での古式捕鯨には北浦捕鯨の名称を用いている。また近代捕鯨とは、1864年にノルウェーで開発され、1899年に山口県の日本

遠洋漁業株式会社が導入しその後全国に広まった、動力船に搭載した捕鯨砲によって鯨を捕獲する捕鯨法を指す。

## 結果と考察

### \*明治期のみの記録種

#### シロナガスクジラ *Balaenoptera musculus*

多田 (1978) によれば、北浦捕鯨によって黄波戸 (長門市日置上) では1887年 (明治20年) から1893年 (明治26年) の間に「白長曾」「灰色長曾」の名称で9頭の捕獲があり、川尻 (長門市油谷川尻) では1894年 (明治27年) から1901年 (明治34年) の間に9頭の捕獲があった。また瀬戸崎 (長門市仙崎) では1876年 (明治9年) から1894年 (明治27年) の間に「長曾」の名称で9頭の捕獲が記録されており、粕谷と山田 (1995) の分析では、これらはシロナガスクジラに相当する。一方、笠原 (1950) によれば長門市仙崎を含む日本海の第XI海区 (佐賀県唐津市呼子～対馬) において1911年 (明治44年) から1925年 (大正14年) の間に少なくとも10頭のシロナガスクジラが近代捕鯨で捕獲されているが、仙崎の事業所は戦後開設とされているので山口県での捕獲は無かったと考えられる。また松浦 (1935b) は日本海のシロナガスクジラについて、朝鮮半島東岸の長箭および蔚山で1910年から1914年の間に少数の捕獲があったと述べているが、山陰地方での捕獲について記載はない。ストランディングレコードにも日本海における本種の記録は無く、山口県における本種の記録は多田 (1978) が記載した1901年 (明治34年) に川尻で捕獲された2頭が最後となる。

山口県への来遊の季節は瀬戸崎、黄波戸、川尻の捕獲記録からは11月～3月となるが、これは当時の北浦捕鯨における操業時期であり、これ以外の時期に山口県近海をどの程度通過したかについては不明である。

#### イワシクジラ *Balaenoptera borealis*

本種の山口県における記録は、北浦捕鯨において黄波戸 (長門市日置上) で1887年 (明治20年) に「鰯」の名前で1頭の捕獲記録があるのみである (多田 1978)。しかし本種は元来日本海にはほとんど分布しておらず (河村 1996、Ishikawa 2009a)、1950年代までニタリクジラがイワシクジラと同一種とされていた (粕谷と山田 1995) ことから、この個体はニタリクジラであった可能性がある。一方、当時はミンククジラを種として認識していなかった事 (粕谷と山田 1995)、明治末期のイワシクジラの説明に「髭の色は白の黄色がかったもので長さ二尺位」などの表記があり (明石 1910)、ミンククジラを連想させることから、ミンククジラをイワシクジラと記載していたことも考えられる。

#### セミクジラ *Eubalaena japonica*

セミクジラは北浦捕鯨において、江戸期ではザトウクジラに次いで捕獲が多かったが、1854年 (安政年代) 頃から急激に減少して、1860年 (万延元年) から1883年 (明治16年) の間に川尻 (長門市油谷川尻) で4頭捕獲された以降は記録が無い (多田 1978)。笠原 (1950) によれば、日本海では第XI海区 (佐賀県唐津市呼子～対馬) において1923年に1頭捕獲されたのが最後の記録である。日本沿岸の日本海側におけるセミクジラのストランディングは、1982年に新潟県佐渡で混獲された事例と、2007年に福井市に漂着した事例がある (石川ら 2013)。すなわち近年でも稀ではあるものの日本海に本種は回遊しているが、山口県内では記録が無く、前述の江戸末期～明治初期の川尻の捕獲が最後である。

### コククジラ *Eschrichtius robustus*

コククジラは北太平洋の東西に分布する2つの系群があり、日本および中国・朝鮮半島沿岸を季節移動する個体群をアジア系群、西系群などと呼ぶ。極沿岸域を移動回遊するため、各地で古くから古式捕鯨における捕獲対象種となっており、北浦捕鯨では「青鷺」の名前で呼ばれていた。山口県における明治期以降の捕獲は多くはなく、瀬戸崎（長門市仙崎）で1876年（明治9年）から1892年（明治25年）の間に14頭、黄波戸（長門市日置上）で1887年（明治20年）から1890年（明治23年）の間に9頭、川尻（長門市油谷川尻）では1894年（明治27年）から1900年（明治33年）の間に7頭の捕獲が記録されているに過ぎない（多田 1978）。

本種のアジア系群はもともと資源量が小さかったと考えられ、19世紀末から朝鮮半島の蔚山、長箭を拠点に近代捕鯨が始まると急激に資源量が枯渇し、大陸側の韓国では1966年の捕獲を最後に、1977年に目撃例が1回あるのみである（Kato and Kasuya 2002、南部ら 2010）。日本近海の主要な回遊路は従来太平洋側と考えられ（大隅 1995）、現在でも稀に目撃例や漂着がある（石川ら 2013）。一方、日本沿岸の日本海側におけるコククジラの回遊路の存在は長らく不明であったが、近年の研究から明治期には北海道（4月～6月）から福井・石川県（3月～5月）まで来遊していたことが明らかとなった。他、昭和期以降も1955年3月と1970年4月には富山湾で混獲され、北海道、新潟県でもストランディング事例があったことから、日本海側の回遊路は、利用頻度は少ないながらもなお存在すると考えられている（南部ら 2010）。また2014年3月には、新潟県寺泊地先にコククジラが約2週間滞在したことが確認された（青柳ら 2014）。山口県における本種の記録は明治期以降見当たらないが、現在も日本海側の回遊路を利用する個体が存在するのであれば、山口県沿岸を通過している可能性は十分にあり、今後の発見が期待される。

### \* 明治期以降の記録種

#### ザトウクジラ *Megaptera novaeangliae*

ザトウクジラは、北浦捕鯨において最も捕獲数が多かった種である。山口県への来遊の季節は北浦捕鯨の操業時期である11月～4月で、1901年（明治34年）には川尻（長門市油谷川尻）で13頭の捕獲が記録されている（多田 1978）。近代捕鯨が始まった19世紀末以降も、朝鮮半島を中心に日本海で捕獲があったが頭数は多くなかった。例えば笠原（1950）によれば、蔚山を中心とする海区XIIIでは、1914年にナガスクジラが106頭、コククジラが109頭捕獲されているがザトウクジラはわずか12頭で、その後も1949年まで0～7頭で推移したにすぎず、資源が早期に枯渇したことは明らかである。現在では、本種は繁殖海域である沖縄付近や小笠原周辺で頻繁にみられ、ストランディングレコードも日本の太平洋沿岸で増加傾向にあるが、日本海沿岸では20世紀以降は10件記録されているのみである（石川ら 2013）。山口県での記録は、前述の1901年以降では1913年（大正2年）4月に関門海峡に3頭が入り込み、当時設立間もなかった東洋捕鯨株式会社が、下関に係留していた捕鯨船でこのうち2頭を捕獲したとの記載がある（下関市 2012）。

#### ナガスクジラ *Balaenoptera physalus*

ナガスクジラは北浦捕鯨では「長曾」「野曾」の名前で呼ばれ、主要な鯨種のひとつだった。明治期でも瀬戸崎（長門市仙崎）で1876年（明治9年）から1894年（明治27年）の間に78頭、黄波戸（長門

市日置上) で1887年(明治20年)から1893年(明治26年)の間に48頭、川尻(長門市油谷川尻)では1894年(明治27年)から1901年(明治34年)の間に55頭の捕獲が記録されている(多田 1978、粕谷と山田 1995による補正值)。ただしこれらの捕獲には、当時独立した種として認識されていなかったミンククジラも含まれている可能性がある。

ナガスクジラは、19世紀末から対馬海峡西側から朝鮮半島東岸の長箭および蔚山に至る日本海で行われた近代捕鯨においても、長らく主要な捕獲対象種であった(松浦1935a、笠原 1950)。戦後も韓国の捕鯨会社によって捕獲が続いたが、1960年代以降は資源が枯渇して捕獲頭数が激減し、捕獲対象はミンククジラへと移って行った(Tonnessen and Johnsen 1982)。日本沿岸の日本海側におけるナガスクジラのストランディングは、1970年以降では12件記録されている。記録はすべて11月~5月の間で、山口県での記録は1996年12月21日に長門市油谷大浦に漂着した1例がある(石川ら 2013)。体長6.2mで鯨種は日本鯨類研究所のDNA分析で確定したが、著しく消瘦していたこと及びナガスクジラ新生児の体長は6.4mと推定されている(大隅 1996)ことから、新生児が何らかの理由で親から逸れたことが原因と思われる。

#### ニタリクジラ *Balaenoptera edeni*

本種が北太平洋に分布することが明らかになり、イワシクジラとの識別がなされるようになったのは1950年代からで(粕谷と山田 1995)、それ以前の記録にこの種名は記載されていない。イワシクジラと同様、元来日本海側には分布しないと考えられているが(島田 1996)、日本海におけるストランディングレコードは山口県と島根県に各1件ある。このうち山口県の記録は1998年8月に豊浦郡(現:下関市)豊北町角島に漂着した個体で、頭部が欠損していたが日本鯨類研究所のDNA分析により種が判明した(石川ら 2013)。また山口県水産研究センターでは1999年10月5日に調査船で海洋観測中に萩市見島沖で大型鯨2頭を発見し、撮影された映像から後にニタリクジラの可能性が高いと判断された。鯨の周辺にはカツオまたはマグロの幼魚が群泳し、海面上は海鳥が乱舞していた。当時の見島周辺ではウルメイワシが好漁で、この鯨もウルメイワシを摂餌していた可能性が高い。

#### ツノシマクジラ *Balaenoptera omurai*

1998年9月11日に、豊浦郡(現:下関市)豊北町角島で、漁船と衝突して死亡した鯨が引き揚げられた。国立科学博物館、水産総合研究センター中央水産研究所および岩手県立博物館が、内外の研究機関の協力を得て調査した結果、本個体は90年ぶりに発見されたヒゲクジラ亜目の新種であることが判明した(Wada et al. 2003)。現在角島の「つのしま自然館」には、新種発見された個体の骨格(標準標本)のレプリカが展示されている。

山口県日本海側で新種として発見されたツノシマクジラであるが、日本沿岸ではその後2013年までに瀬戸内海で1例、太平洋側で4例発見されたに過ぎない(石川ら 2013)。その後の研究から本種は日本近海種と言うよりは、南半球の低緯度からフィリピン、タイ、台湾から日本にかけて分布すると考えられている(Yamada et al. 2008、後藤 2012)。

#### ミンククジラ *Balaenoptera acutorostrata*

日本近海における本種の分布が確認され、コイワシクジラ(小鰭鯨)の名称が与えられたのは1915年とされ、ミンククジラの名前は1960年代後半頃から一般化してきた(粕谷と山田 1995)。ヒゲクジ

ラの種では最も資源量が多く、日本近海でも沿岸から沖合まで分布しており、稀ではあるが瀬戸内海でも発見がある。沿岸の定置網による混獲が多い種としても知られ、全国で毎年100頭以上が混獲されている (Ishikawa 2009b)。

本種は山口県内では後述のスナメリに次いで記録が多い。本種を含む、混獲された大型鯨類のDNA登録制度が始まった2001年以降の記録では、山口県内では2013年までに35件のストランディングレコードがあり、定置網による混獲が29件、死体漂着が6件となっている (石川ら 2013)。地域別での内訳は長門市15件、萩市13件、阿武町3件、下関市3件、宇部市1件となっており、下関市と宇部市の計4件と長門市の2件は漂着事例で、他はすべて定置網による混獲であった。海域別に県内のストランディングレコードに占める割合をみると、日本海側では47.1%を占めるが、関門海峡部では1.2%、瀬戸内海側では0.9%で、日本海側に集中している。

ストランディングを月別に見ると、8月と10月を除くすべての月で発生しているが、夏期の記録は7月に2件、9月に1件と乏しく、1月～4月で23件 (65.7%) を占め、2月が8件で最も多かった (図1)。体長記録のある県内32個体の体長は2.8m～6.0mの範囲で平均は4.3mで、この値は本種の平均性成熟体長である雄

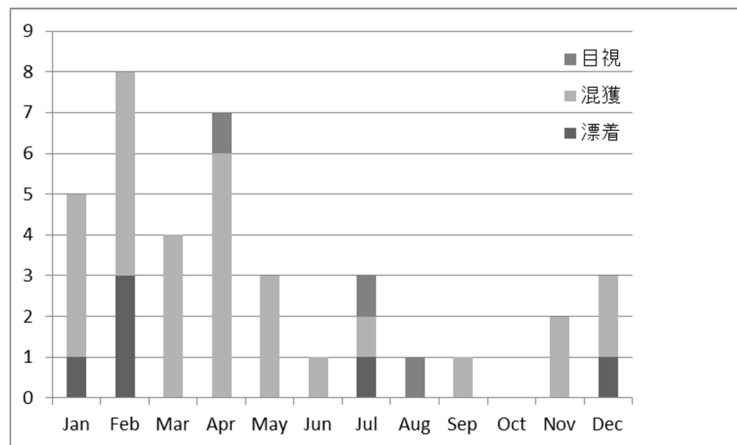


図1. 2001年以降の山口県におけるミンククジラの月別ストランディング及び沖合での発見記録。石川ら (2013)、Miyashita and Okamura (2012)、山口新聞 (2011) に著者らの発見情報を加え作成。

6.3m、雌7.1m (Kato 1992) と比較して明らかに小さい。本種は未成熟個体が極沿岸に多く分布し、少なくとも

もその一部は、富山湾など餌の豊富な場所で周年滞在していることが示唆されている (石川 2007)。

沿岸でのストランディングレコードに比べると山口県沖合における本種の発見記録は乏しい。独立行政法人水産総合研究センター遠洋水産研究所

(現: 国際水産資源研究所) は2001年～2003年の各年に、ミンククジラの北上回遊時期と思われる4月中旬～5月上旬に九州北部から隠岐の島付近までを含む日本海のミンククジラ目視調査を行った。3回の調査 (総探索マイル数2705.5マイル、2001年は富山湾までの調査コースを含む) で13群15頭のミンク



図2. 下関鯨類研究室と山口県水産研究センターの共同研究による定線目視調査で発見されたミンククジラ (2014年7月2日、長門市川尻北西27マイル)。

クジラを発見したが、このうち山口県沖では1群のみの発見であった (Miyashita, 2002, Miyashita and Okamura 2012)。下関鯨類研究室と山口県水産研究センターの共同研究による定線目視調査では、これまで10回の調査 (総探索マイル数1285マイル、ただし調査員は1名) で、ミンククジラの実見は2014年7月2日に長門市川尻北西27マイルで発見された1頭のみ (水温24.2℃、水深136m、図2) であった。この他では、2011年8月6日に萩港見島行の定期船上から、相島沖でジャンプする体長4m～5mのミンククジラ1頭が発見撮影されている (山口新聞 2011)。2例のみの記録だが、本種が山口県沖合に夏期も

分布していることを示す貴重な記録である(図1)。

#### マッコウクジラ *Physeter macrocephalus*

本種は深海性のイカ類を主要餌生物とするため、水深の浅い日本海にはほとんど分布しない(加藤1996)。山口県では、1998年10月に油谷湾奥(長門市油谷後畑)に成熟雄と見られる1個体が迷入し、その後自力で湾外に出た記録がある(石川ら 2013)。この他では、1993年12月に下関市下関漁港に解体された頭部が漂流しているのが発見されたが、その後の調査で、青森県八戸で混獲された個体と判明した(石川ら 2013)。

#### コマッコウ *Kogia breviceps*

本種は日本近海では北海道南部から沖縄まで広く分布する。日本海側では石川県以南でストラレンジングレコードがあるが、山口県での記録は、1985年9月に下関市吉母海岸に2頭が座礁し救助放獣された1例がある(石川ら 2013)。

#### オガワコマッコウ *Kogia sima*

コマッコウ同様に日本近海に広く分布するが、コマッコウよりも暖海に分布すると考えられている。山口県での記録は2001年4月に長門市深川に体長2.35mの雄の死体が漂着した1例がある(石川ら 2013)。

#### オウギハクジラ *Mesoplodon stejnegeri*

本種は北太平洋の特産種だが、日本近海における記録はほぼ日本海に限定され、その他の海域ではオホーツク海と、太平洋側では宮城県以北に少数のストラレンジングレコードがあるのみである

(Yamada 2009、石川ら 2013)。山口県での記録は、1997年4月に下関市豊浦町川棚(雄)、2002年11月に同市同町湯玉(雄)、2010年2月に長門市油谷川尻(雌4.8m)の3例の死体漂着がある。また種不明オウギハクジラ属として1998年5月に長門市油谷に体長約5mの雄が座礁後死亡した事例と、2006年4月に同市油谷角山に座礁した体長約5mの個体を漁業者らが曳航して油谷湾口で放獣した事例がある(石川ら 2013)が、日本海におけるオウギハクジラ属の分布はほぼ本種に限られることから、両者ともオウギハクジラと見て良いだろう。

#### バンドウイルカ *Tursiops truncatus*



図2. 下関鯨類研究室と山口県水産研究センターの共同研究による定線目視調査で発見されたバンドウイルカ(2014年7月2日、長門市今岬北2.2マイル)。

本種は北海道南部以南の日本近海に広く分布する(竹村 1996)が、山口県における記録は少なく、ストラレンジングレコードは日本海側では2004年5月末に下関市豊北町、瀬戸内海側では2005年9月に宇部市西岐波で、ともに座礁した個体を水族館職員が救助放獣した記録があるのみである(石川ら 2013)。しかし近年になり、日本海側の響灘(下関市)から長門市の沿岸で10頭前後の群れが複数回出現しており、2013年3

月、同年4月および2014年4月の発見観察では、共通する個体が数頭確認されている（久志本ら 2014、ただし報告ではバンドウイルカ属として記載されミナミバンドウイルカの可能性を排除していない）。下関市角島でも2011年5月に10数頭の群れの発見があった（林 2013）他、下関鯨類研究室と山口県水産研究センターの共同研究による定線目視調査では、2014年7月2日に長門市今岬北2.2マイルで15頭の群れを発見した（水温22.9℃、水深90m、図3）が、映像記録からは前述の個体群と同群との確認はできなかった。

#### カマイルカ *Lagenorhynchus obliquidens*

日本海側のカマイルカは春から夏にかけて北上する回遊が知られており（岩崎 1997）、一部は4月から6月に津軽海峡を抜けて北海道南部に移動する他は、北海道日本海側からオホーツク海まで移動すると考えられている（松田ら 2011）。ストランディングレコードから見た日本海側における本種の記録は、1月から3月頃までは北九州から北陸付近に見られるが、4月頃から次第に北側に移動し、6月には能登半島以西、7月には本州以南の記録がほとんどなくなり、本種の北上移動を裏付けている（図4）。なお、9月～11月の間は本種の日本沿岸のストランディングレコードは皆無に近く、この間は沿岸を離れ沖合に移動している可能性が高い。

山口県でのストランディングレコードは、長門市において2007年、2012年の2月に2例、1999年3月に1例があるのみだが、沖合では下関鯨類研究室と山口県水産研究センターの共同研究による定線目視調査で、2013年1月31日に萩市見島東北東6マイル沖で約30頭の群れを発見している（水温13.9℃、水深72m）。また萩港-見島航路の乗組員に鯨類の出現状況について尋ねたところ、「鯨は滅多に見ないが春先にはイルカをよく見る」との話であった。この時期に集団で移動することの多い本種の可能性があるだろう。

#### ハセイルカ *Delphinus capensis*

本種は、以前には同属で吻の短いマイルカ *Delphinus delphis* と同種として取り扱われたことがあったが、現在では別種とするのが一般的である（粕谷と山田 1995）。日本近海では東シナ海と日本海および太平洋側では四国・九州沿岸部に分布しており（笠松ら 2009）、瀬戸内海でも12月～5月の間に主に愛媛県沖で数十頭の群れが遊泳しているのが目撃されている（石川ら 2013）。山口県でのストランディングレコードは5件あり、うち4件は下関市の日本海側（響灘）で、1件は瀬戸内海側の周南市ですべて単独個体であった。時期は2月～6月で、5件中4件は発見時に生存しており、残る1件でも死体の鮮度が良かったことから漂着時は生存していた可能性がある（石川ら 2013）。

#### マダライルカ *Stenella attenuata*

#### スジイルカ *Stenella coeruleoalba*

#### シワハイルカ *Steno bredanensis*

これらの種は基本的に熱帯から温帯域の外洋性のイルカで、ストランディングも多くは太平洋側、東シナ海側で発生し、日本海側や瀬戸内海では稀である（石川ら 2013）。山口県での記録はすべて日本海側で、シワハイルカが下関市（2003年7月）と長門市（2006年8月）の2件、マダライルカは下関市（2012年12月）で1件の記録がある。これら3件はすべて単独個体の生存漂着であるが、スジイルカは1998年5月17日に下関市安岡海水浴場に24頭がマス・ストランディングした記録がある。市職員らが12



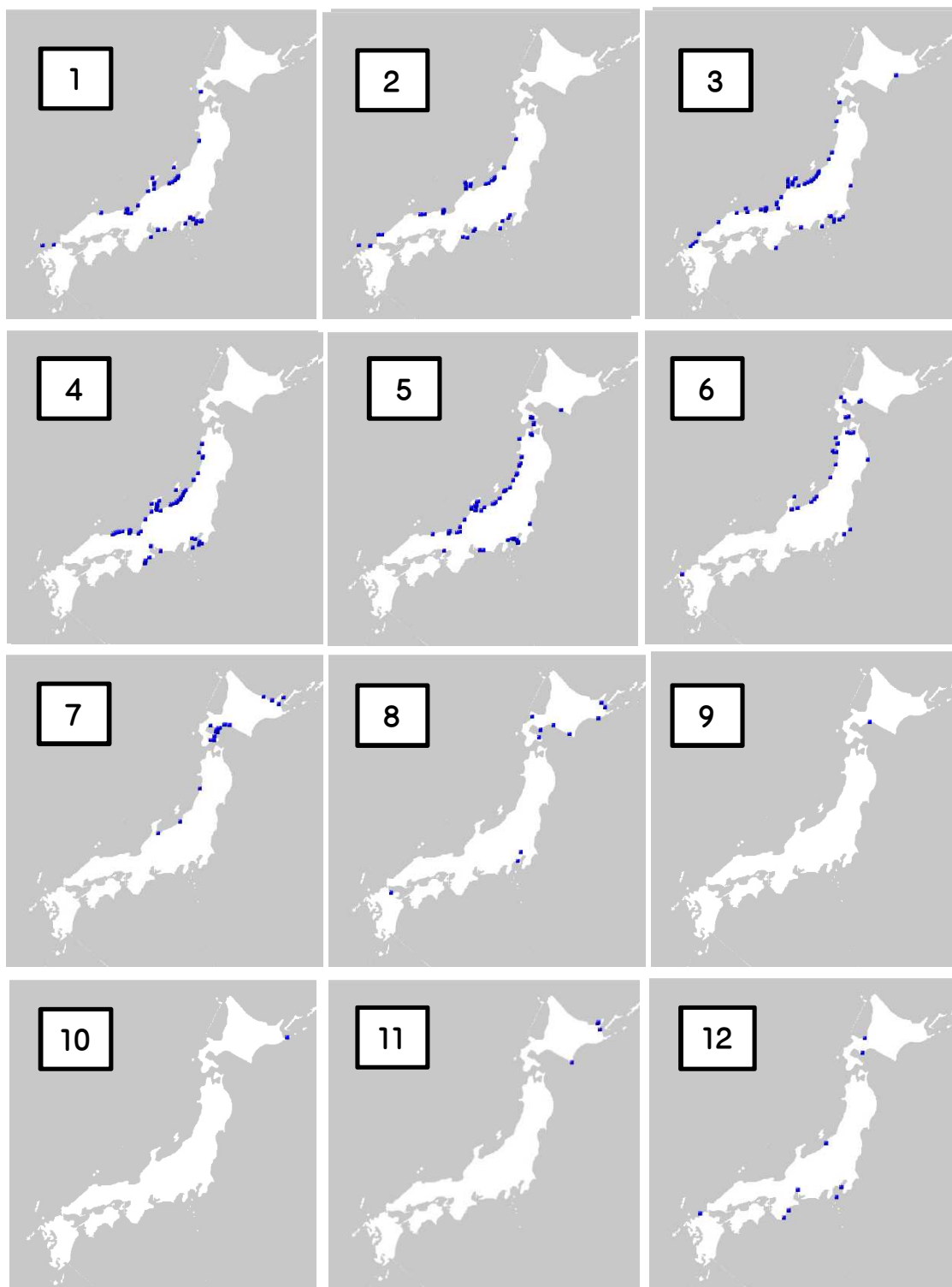


図4. 日本沿岸におけるカマイルカのストランディング位置の月別変化。日本海側では3月頃から北側に移動し、9～11月の間は太平洋側を含めほとんど記録が無くなる（石川ら 2013を元に作図）。

頭を救助放獣したが12頭が死亡し、死亡個体はすべて雄であった（石川ら 2013）。前述のハセイイルカおよび同属のマイルカもそうであるが、これら外洋性のイルカ類は死体漂着よりも生存漂着が多いのが特徴である（石川と荻野 2001）。

ハナゴンドウ *Grampus griseus*

本種は温帯から熱帯にかけて幅広く分布する種で、単独ないしは数頭で定置網や敷網で混獲されたり漂着したりする例が多い(木白 1997)。山口県では5件のストランディングレコードがあり、うち4件が日本海側(下関市3件4頭、萩市1件2頭)で、萩市の記録は定置網による混獲である(石川ら 2013)。出現時期は3月~11月と幅広い。瀬戸内海側では2014年3月に防府市三田尻港に1頭が迷入した記録がある。沖合では下関鯨類研究室と山口県水産研究センターの共同研究による定線目視調査で、2014年5月1日に下関市角島北西沖90マイルで約20頭の親子を含む群れを発見している(水温15.1℃、水深500m+)。

コビレゴンドウ *Globicephala macrorhynchus*

本種は世界中の温暖な海域に生息しているが、日本海および北九州周辺には本種の生息は比較的に少ない(粕谷 1995)。山口県における記録は1961年3月に萩市で生存漂着した1例があるのみである(石川ら 2013)。

シャチ *Orcinus orca*

本種は世界中の海に分布し、日本周辺においては北緯20度台から60度台のオホーツク海まで分布し、北緯40度以北に密度が高いが出現時期は周年に及んでいる(宮下 2009)。山口県における本種のストランディングレコードは無いが、沖合では下関鯨類研究室と山口県水産研究センターの共同研究による定線目視調査で、2012年11月21日に長門市川尻岬北北西46マイルで3頭の群れを発見している。萩市見島周辺海域ではイカ漁の漁師が冬期に頻繁に見るとの情報もある(久志本 2014)ので、本種は冬期の沖合では珍しくないのかもしれない。

スナメリ *Neophocaena phocaenoides*

本種は日本近海では仙台湾~東京湾、伊勢湾・三河湾、瀬戸内海~響灘、大村湾、有明海・橘湾の5海域に主に分布しており、互いに異なる5つの系群に分かれていると考えられている。極沿岸に生息する種で、瀬戸内海においては距岸1.85km以内で水深10~20mの水域に多い(Shirakihara and Yoshioka 2011)。山口県では瀬戸内海~響灘の系群が生息し、ストランディングレコードが最も多く、沿岸か



図5. 山口県及び福岡県東部におけるスナメリのストランディングレコード分布。石川 (2013) より転載。

らもしばしば見られる種である。ストランディングレコードから見る限り、県内日本海側の分布範囲は角島付近までと考えられる(図5)。ストランディングレコードに占める本種の割合を、前述のミンククジラと同じ条件(2001~2013年)で海域別に比較すると、日本海側では27.1%(19件)、海峡部では97.5%(79件)、瀬戸内海では96.3%(103件)となり、スナメリが瀬戸内海および海峡部に常在する種であることを示している。月別の比較では周年記録があるが、4月~6月に最も多く、10月~11月にもやや増加する傾向がある(図6)。

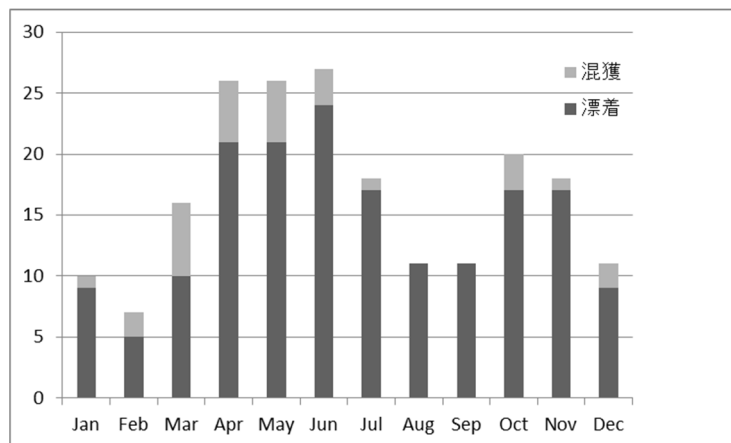


図6. 2001年~2013年の山口県におけるスナメリの月別ストランディングレコード。石川ら(2013)を元に2013年の情報を加え作成。

人間の生活圏に近い沿岸に生息する特性を持つためか、スナメリには昔から多くの異名(地方名)があることが知られている(白木原 2003)。山口県におけるスナメリの地方名は、県西部ではナメト、ナメット、ナメなど「ナメ」を含む名が多い一方、県東部(柳井市、周防大島など)ではデゴンドウ、レゴンドウなど「ゴンドウ」を含む名が多いという特徴がある(石川 2013)。

### 論議

山口県における明治期以降の記録として、ヒゲクジラ類8種、ハクジラ類14種の計22種が収集された。うちヒゲクジラ類4種については日本海側における明治期のみの記録に留まり、シロナガスクジラについては、現在日本海に生息しているかどうかも疑わしい。かつて北浦沿岸にセミクジラ、シロナガスクジラやコククジラなどが頻繁に来遊していた景色は、現在の山口県周辺のストランディングレコードや目視調査の結果からは想像することもできない。これは19世紀末から朝鮮半島を中心に始まった近代捕鯨が、日本海だけでなく、これら大型鯨類の繁殖海域を含んでいたであろう黄海や東シナ海まで展開されたこと(笠原 1950、西脇 1959、Tonnessen and Johnsen 1982、粕谷1992a、1992b)による資源枯渇が最も大きな原因であろう。

一方、例えばザトウクジラはかつて世界的な捕獲圧のために絶滅危惧種となったが、近年は南北半球で資源が順調に回復しており(Mori 2005, Clapham 2009)、日本近海でも太平洋側ではザトウクジラのストランディングレコードが増加してきている(石川ら2013)。本種の日本海側での増加傾向はまだ見られないが、今後繁殖海域の保全が進めば、いずれは日本海を通過するザトウクジラも増加するに違いない。その後は、現在は数が少ない日本海におけるナガスクジラやセミクジラの資源回復、また将来には明治以降沿岸から姿を消したシロナガスクジラが戻って来る事を期待したい。

瀬戸内海側に関しては、現在では常在する種はスナメリのみであり、他の種は稀に外海(太平洋側)から進入してくるものと考えられる。しかし少なくとも明治期頃までは、瀬戸内海には多くの大型鯨が回遊しており、これらの鯨を捕獲対象として古式捕鯨を行った捕鯨会社(讃岐捕鯨)が香川県に1896年(明治29年)に設立されている。捕獲対象種については明確な記録が無いものの、瀬戸内海に残された鯨墓や断片的な記録などから、コククジラないしはナガスクジラだったのではないかと考えられ

ている(富士川 2007)。Omura (1974) は、山口県南側から別府湾がかつてコククジラの繁殖場であった可能性を示唆しているが、これを否定する意見もある(大隅 1995)。一方、Omura (1974) には、1875年～1896年に浮津(高知県室戸市)における古式捕鯨の捕獲統計が掲載されており、この中にはシロナガスクジラ、ナガスクジラ、コククジラの他に、ニタリクジラ(イワシクジラをニタリと解釈)、ザトウクジラ等が含まれている。これら四国太平洋沿岸に來遊していた大型鯨が、実際に繁殖海域として利用していたかはさておき、当時の瀬戸内海に頻繁に進入していた可能性は十分考えられ、またその中には当時は種として認識されていなかったミンククジラも数多く含まれていたに違いない。

山口県近海の鯨類分布状況の過去、現在そして将来にわたる推移を予想するためには、鯨資源の個体数動態もさることながら、沿岸において鯨の餌となる生物資源分布や水温、海流などの海洋環境の変化が、鯨の回遊に与える影響も把握することが重要である。今後も下関鯨類研究室と山口県水産研究センターでは、これらの情報の収集と分析を行っていく予定である。

### 謝辞

山口県水産研究センターとの共同研究を始めるにあたって、同センター河野光久外海研究部長ならびに、つのしま自然館の小林知吉氏にご尽力をいただいた。また乗船調査においては同センター調査船「くろしお」の乗組員の皆様に大変お世話になった。(一財)日本鯨類研究所の大隅清治顧問には、お忙しい中を拙稿に目を通していただき、貴重なご意見を多数いただいた。深く感謝する。

### 参考文献

- 明石喜一 1910 本邦の諾威式捕鯨誌. 東洋捕鯨株式会社, 大阪. (1989 マツノ書店による復刻版 明治期日本捕鯨誌 280+40pp) .
- 青柳彰, 奥田潤, 南部久男, 本間義治, 山田格, 佐藤隆, 太田希生, 大原淳一 2014 2014年春に信濃川大河津分水路河口付近に出現したコククジラの目視観察. 日本セトロジー研究会第25回(松山)大会発表要旨集: 37.
- Clapham, P. J. 2009 Humpback Whale. Encyclopedia of Marine Mammals (Second Edition) (Perrin, W. F., Wursig, B. and Theewissen, J. G. M. eds.) :582-585. Academic Press, MA.
- 富士川仁 2007 香川県に興った捕鯨会社. 瀬戸内海をクジラが泳いだ: 4-5. 香川歴史博物館.
- 後藤睦夫 2012 ツノシマクジラの外部形態と分布域の推定およびBryde's whale complexに関する一考察. 鯨研通信, 455: 1-9.
- 林透 2013 私信.
- 石川創, 荻野みちる 2001 大型鯨類のライブストランディングーその問題点と対応ー. 日本セトロジー研究, 11: 21-29.
- 石川創 2007 ストランディングレコードから見た日本沿岸のミンククジラの回遊. 日本セトロジー研究会第18回(宮崎)大会発表要旨集: 5.
- Ishikawa, H. 2009a *Balaenoptera borealis*. The Wild Mammals of Japan (Ohdachi.S.D., Ishibashi, Y. Iwasa, M.A. and Saitoh, T. eds.) : 323-324, SHOUKAIDOH, Kyoto.
- Ishikawa, H. 2009b *Balaenoptera acutorostrata*. The Wild Mammals of Japan (Ohdachi.S.D., Ishibashi, Y. Iwasa, M.A. and Saitoh, T. eds.) : 320-322, SHOUKAIDOH, Kyoto.
- 石川創 2013 山口県におけるスナメリの地方名の研究. 日本セトロジー研究, 23: 1-5.
- 石川創, 後藤睦夫, 茂越敏弘 2013 日本沿岸のストランディングレコード(1901～2012). 下関鯨類研究室報告 No.1,

- 下関海洋科学アカデミー鯨類研究室, 山口. 314pp.
- 岩崎俊秀 1997 カマイルカ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(IV): 410-413, 日本水産資源保護協会, 東京.
- 笠原昊 1950 日本近海の捕鯨業とその資源. 日本水産株式会社研究所報告 4, 日本水産株式会社研究所, 東京. 103pp.
- 笠松不二男, 宮下富夫, 吉岡基 2009 新版 鯨とイルカのフィールドガイド. 東京大学出版会, 東京. 148pp.
- 粕谷俊雄 1992a 北太平洋におけるザトウクジラ捕獲の歴史とかつての生息数 (1). *Megaptera* 7:4-6.
- 粕谷俊雄 1992b 北太平洋におけるザトウクジラ捕獲の歴史とかつての生息数 (2). *Megaptera* 8:4-6.
- 粕谷俊雄 1995 コビレゴンドウ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(II): 542-551, 日本水産資源保護協会, 東京.
- 粕谷俊雄, 山田格 1995 日本鯨類目録. 鯨研叢書 7, 日本鯨類研究所, 東京. 90pp.
- Kato, H. 1992. Body length, reproduction and stock separation of minke whales off northern Japan. *Rep. Int. Whal. Commn* 42:443- 453.
- 加藤秀弘 1996 マッコウクジラ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(III): 319-327, 日本水産資源保護協会, 東京.
- Kato, H. and Kasuya, T. 2002 Some analysis on the modern whaling catch history of the western North Pacific stock of gray whales, with special reference to the Ulsan whaling ground. *J. CETACEAN RES. MANAGE.* 4(3): 277-282.
- 河村章人 1996 イワシクジラ. 日本動物大百科2 哺乳類II: 40-41, 平凡社, 東京.
- 河野光久 2008 近年の山口県日本海沿岸に出現した鯨類. *Bull. Yamaguchi Pref. Fish. Res. Ctr.* 6; 75-78.
- 木白俊哉 1997 ハナゴンドウ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(IV): 418-425, 日本水産資源保護協会, 東京.
- 久志本鉄平 2014 私信.
- 久志本鉄平, 落合晋作, 立川利幸, 石橋敏章 2014 山口県日本海側のバンドウイルカ属の写真カタログの作成. 日本セトロジー研究会第25回(松山)大会発表要旨集: 36.
- 松田純佳, 岩原由佳, 小林沙羅, 金子信人, 鈴木励, 松石隆 2011 津軽海峡におけるカマイルカの来遊個体数推定. 日本セトロジー研究, 21: 15-18.
- 松浦義雄 1935a 日本近海に於ける長須鯨の分布及び習性に就て. *動物学雑誌*, 47(560): 355-371.
- 松浦義雄 1935b 日本近海に於ける白長須鯨の分布及び習性に就て. *動物学雑誌*, 47(565): 742-759.
- 美島龍夫 1899 捕鯨新論. 嵩山房出版, 東京. 51pp.
- Miyashita, T. 2002 Cruise report of the Japanese sighting survey under the joint research program between Japan and Korea in 2000 and 2001. Document SC/53/RMP6 presented to the IWC Scientific Committee, July 2001, London, 5pp (unpublished).
- 宮下富夫 2009 日本近海に於けるシャチ資源の動向. シャチの現状と繁殖研究に向けて 2007シンポジウムプロシーディングス(加藤秀弘・吉岡基 編), 鯨研叢書 14: 1-6, 日本鯨類研究所, 東京.
- Miyashita, T. and Okamura, H. 2012 Abundance estimates of common minke whales using the Japanese dedicated sighting survey data for RMP Implementation and CLA- Sea of Japan and Sea of Okhotsk. Document SC/63/RMP11 presented to the IWC Scientific Committee, June 2012, Panama, 34pp (unpublished).
- Mori, K. 2009 *Megaptera novaeangliae*. The Wild Mammals of Japan (Ohdachi.S.D., Ishibashi, Y. Iwasa, M.A. and Saitoh, T.

eds.): 334-335, SHOUKAIDOH, Kyoto.

中園成生 2001 くじら取りの系譜. 長崎新聞社, 長崎. 223pp.

南部久男, 石川創, 山田格 2010 アジア系コククジラの記録—その分布と回遊—. 日本セトロジー研究, 20: 21-29.

西脇昌治 1959 琉球海域に於けるザトウ鯨. 1959年度琉球近海産鯨族資源の生物学的調査報告. 琉球捕鯨協会, 73pp.

Omura, H. 1974 Possible migration route of the gray whale on the coast of Japan. *Sci. Rep. Whales Res. Inst.* 26:1-14.

大隅清治 1995 コククジラ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(II): 513-520, 日本水産資源保護協会, 東京.

大隅清治 1996 ナガスクジラ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(III): 306-311, 日本水産資源保護協会, 東京.

島田裕之 1996 ニタリクジラ. 日本動物大百科2 哺乳類II: 42-43, 平凡社, 東京.

下関市 2012 下関くじら物語. 下関市.

白木原国雄 2003 日本におけるスナメリの分布. 月刊海洋, 35(8): 538-543.

Shirakihara, M. and Yoshioka, M. 2009 *Neophocaena phocaenoides*. The Wild Mammals of Japan (Ohdachi.S.D., Ishibashi, Y. Iwasa, M.A. and Saitoh, T. eds.): 390-391, SHOUKAIDOH, Kyoto.

竹村暘 1996 ハンドウイルカ. 日本動物大百科2 哺乳類II: 68-69, 平凡社, 東京.

多田穂波 1978 明治期山口県捕鯨史の研究. マツノ書店, 山口. 256pp.

徳見光三 1971 長州捕鯨考. 長門地方史料研究所, 山口. 317pp.

Tonnessen, J. N. and Johnsen, A.O. 1982 The History of Modern Whaling. University of California Press, Berkeley. 798pp.

Wada, S., Oishi, M. and Yamada, T.K. 2003 A newly discovered species of living baleen whale. *Nature* 426 (20): 278-281

Yamada, T.K. 2009 *Mesoplodon stejnegeri*. The Wild Mammals of Japan (Ohdachi.S.D., Ishibashi, Y. Iwasa, M.A. and Saitoh, T. eds.): 352-353, SHOUKAIDOH, Kyoto.

Yamada, T.K., Kakuda, T. and Tajima, Y. 2008 Middle sized balaenopterid whale specimens in the Philippines and Indonesia. *Mem. Natl. Mus. Nat. Sci., Tokyo*, (45):75-83.

山口新聞 2011 ミンククジラ悠々ジャンプ 萩沖で確認. 2011年8月17日付記事.